



ARIMASS Letter

[Association for Risk Management System Studies]

危機管理システム研究学会 2013年3月 第52号

HP <http://arimass.jp/>

第13回年次大会解題

統一テーマ：イシュー・マネジメントの現状と課題

—環境の変化に対する予測と反応—

大会長 青淵 正幸（立教大学）

危機管理システム研究学会第13回年次大会を2013年6月1日（土）に立教大学池袋キャンパスにて開催いたします。統一テーマは「イシュー・マネジメントの現状と課題—環境の変化に対する予測と反応—」と致しました。古来より人類は洪水をはじめとして、生命に直結するような様々なクライシスに直面してきました。しかし、そのたびに復興を遂げ、そのクライシスを記録として後世に残してきました。今日、我々は先人の経験と知恵の記録を参考にしながらクライシスを回避しようとしています。リスクマネジメントは我々が生活を送る中で、自己の生命や財産、あるいは社会を守っていくために必要不可欠なものであることは言うまでもないことでしょう。

我々が平時にリスクと捉えるのは、一般にクライシスの予兆が表面化したときでしょう。植物に例えるならば、クライシスの芽が出た状態です。夜道を走行しているドライバーが十字路を目前にして左方向から明かりが漏れたことを認識した瞬間、クライシス（衝突）のリスク（芽）を察知したことになり、回避行動をとることになるでしょう。しかし、何も無いところから芽は出ません。クライシスの芽（リスク）が出るということは、クライシスの種があることに他ならないのです。本大会でテーマとして取り上げたイシューとは、まさにクライシスの種に相当します。リスクの前段階にあるイシューの管理は、情報社会・知識社会となった21世紀において重要度は増すものと思われます。

このような統一テーマを展開するにあたり、株式会社電通パブリックリレーションズイシューマネジメント室のご協力を得て、基調講演としてイシュー・マネジメントの現状についてご講演をいただきます（講演者は調整中です）。基調講演に続いて、統一論題報告と討論を行います。統一論題報告

	目	次	
巻頭言	1	分科会報告	8
第13回年次大会プログラムについて.....	2	学会員の学位・論文・新刊書のご紹介	14
追悼文.....	5	編集後記	16
リスク随筆	6	事務局からのお知らせ	17

は医療、損害保険、経営学の3分野から1テーマずつとなります。医療分野では大川淳氏（東京医科歯科大学）・高橋誠氏（東京医科歯科大学）・野村徹氏（東京医科歯科大学）による「手術合併症に対する危険源分析－Hazard and Operability Study の経験－人口股関節置換術における神経合併症を対象として」、損害保険分野では鴻上喜芳氏（長崎県立大学）による「損害保険業の課題－近年の危機事例と環境変化を踏まえて－」、そして経営学分野では太田三郎氏（千葉商科大学）による「倒産・再生とイシュー・マネジメント」というテーマで、それぞれご報告いただきます。3つの報告の後には藤江俊彦氏（千葉商科大学）によるコーディネートの下で統一論題討論となります。異分野の研究者が一堂に会して行われる討論では、それぞれの分野の常識と非常識がぶつかりあい、イシュー・マネジメントに関する各分野での固定観念が破壊され、新たな智の結集がなされるものと期待されます。どうぞお誘い合わせの上、大会に足をお運びください。

第13回年次大会プログラム

危機管理システム研究会会長 内田 英二

第13回年次大会長 青淵 正幸

統一テーマ：イシュー・マネジメントの現状と課題

－環境の変化に対する予測と反応－

期日：2013年6月1日（土）9：30～20：00

会場：立教大学池袋キャンパス5号館（午前）・マキムホール（午後）

東京都豊島区西池袋3-34-1（JR線ほか池袋駅西口より徒歩10分）

■受付 9：00～12：00（5号館2階5223教室前）

12：50～17：00（マキムホール3階エレベータホール）

■自由論題報告1（5号館2階5223教室）

9：30～10：10 高市幸男（東京商工リサーチ）

「東日本大震災がもたらした経営リスクの中間集計」

10：10～10：50 中嶋教夫（明星大学）

「大学運営とそのリスク - 明星大学のBSCを中心として - 」

■自由論題報告2（5号館2階5224教室）

9：30～10：10 福田久治（研友社）

「東日本大震災における鉄道の被害・復旧と日本の危機管理の課題」

■自由論題報告3（5号館2階5223教室）

11：00～11：40 浜田勇毅（専修大学大学院）

「収益認識をめぐる国際的動向と日本の企業会計に対する影響」

11：40～12：20 井端和男（公認会計士）

「急激な信用低下にも対応できる企業評価法について－エルピーダメモリとシャープのケーススタディを中心に－」

■テーマセッション（5号館2階5224教室）

10：20～12：20 座長：宮林正恭（千葉科学大学）

テーマ：「リスク危機管理など新しい観点からの技術の特性に関する研究」

◇ 昼 休 み ◇

- 主査報告 13:20~14:00 (マキムホール3階 M301 教室)
 - 教育実践分科会 後藤和廣 (早稲田大学)
 - リスクマネジメントシステム研究分科会 指田朝久 (東京海上日動リスクコンサルティング)
 - リスク事例サロン分科会 小島修矢 (千葉商科大学)
 - メディカルリスクマネジメント分科会 藤谷克己 (日本医科大学)
 - 企業活性化研究分科会 山本洋信 (アップライフシステム研究所)
 - 価値ベース・リスクマネジメント研究分科会 藤江俊彦 (千葉商科大学)
- 会員総会 14:00~14:30 (マキムホール3階 M301 教室)
- 基調講演 14:40~15:20 (マキムホール3階 M301 教室)
 - (報告者およびテーマは調整中)
- 統一論題報告 15:30~17:00 (マキムホール3階 M301 教室)
 - 15:30~16:00 大川 淳 (東京医科歯科大学)
 - 高橋 誠 (東京医科歯科大学)
 - 野村 徹 (東京医科歯科大学)
 - 「手術合併症に対する危険源分析—Hazard and Operability Study の経験—
人口股関節置換術における神経合併症を対象として」
 - 16:00~16:30 太田三郎 (千葉商科大学)
 - 「倒産・再生とイシュー・マネジメント」
 - 16:30~17:00 鴻上喜芳 (長崎県立大学)
 - 「損害保険業の課題—近年の危機事例と環境変化を踏まえて—」
- 統一論題シンポジウム 17:20~18:20 (マキムホール3階 M301 教室)
 - 座長 藤江俊彦 (千葉商科大学)
 - パネリスト 野村 徹 (東京医科歯科大学)
 - 太田三郎 (千葉商科大学)
 - 鴻上喜芳 (長崎県立大学)
- 懇親会 18:30~20:00 (第一食堂2階「藤だな」)
- 大会参加費 (懇親会費を含む)
 - 事前振込 5,000 円 (大学院生は 3,000 円)
 - 当日払 6,000 円 (大学院生は 3,000 円)
 - 非会員 7,000 円 (大学院生は 4,000 円, ただし、会員の紹介での参加は一般 6,000 円, 大学院生 3,000 円)
- 【大会参加費等の払込口座のご案内】
 - 郵便振替口座 記号番号: 00140-6-386220
 - 口座名称: 危機管理システム研究学会第 13 回年次大会
 - ゆうちょ銀行以外の金融機関から送金される場合は次の口座情報をご利用ください。
 - 金融機関名: ゆうちょ銀行 店名: ○一九店
 - 預金種目: 当座 口座番号: 0386220
 - 口座名称: キキカンリシステムケンキユウガツカイダイジユウサンカイネンジタイカイ
- ※事前振込の期限は 5 月 24 日 (金) となります。
- ※昼食 (お弁当) をご希望の方は、別途 1,000 円にて承ります (ただし、事前振込に限らせていただきます)。

※詳細な大会プログラムは4月下旬に郵送いたします。



2012.7

◇池袋駅から立教大学までのアクセス◇
◇立教大学池袋キャンパスの構内図◇

会場(午前)
5号館2階



会場(午後)
マキムホール3階

懇親会会場
藤だな

追悼文

当学会を創設された徳谷名誉会長が、2013年2月8日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。そこで追悼文が寄稿されましたので、ここに掲載させていただきます。

惜しい人材を失った・・あーあー

村上 處直（防災都市計画研究所）

危機管理システム研究学会名誉会長徳谷昌勇先生の訃報に接し驚きを隠せない。それは今年の彼の年賀状はいつもと違いカラフルで、さらに「お元気ですか？ いつかお目にかかりたいと希望しています。」と書かれており、近いうちに連絡しようと考えていた矢先だったからだ。

私が丁度東大の博士課程に進む1962年に都市工学科が新設され都市防災の高山英華研究室に入り、公害問題や防災問題の解決のため都市計画の場で苦悶していた。しかし昭和39年の新潟地震以降東京都の防災会議に設置された地震部会に高山委員の代理として参加し、都市の危機管理の問題に目覚め、地震問題を耐震とか耐火という工学的な側面からだけでなく発言する専門家として成長していた。かなり早い時期から成蹊大学の徳谷教授とは言葉を交わすようになっていた。特に徳谷さんが地震時の金融危機の問題に関心を持たれ、良く一緒にするようになり、その後彼が設立する「危機管理システム研究学会」を手伝うこととなった。1978年の宮城沖地震以降アメリカ・カリフォルニア州の地震対策に関わるようになり、彼らの危機管理的思考に共鳴し、いろんな問題提起をしたが「狼少年」のような扱いを受けていた。ようやく1995年の阪神大震災に始まり、2011年の東日本大震災を経験し日本社会も危機管理問題に関心を持ち始め、都市計画の場にも危機管理的思考の研究室が成り立つのではと感じ始めていた時、徳谷先生の賀状を頂き、近いうちに会うべきだと考え始めていた。そして訃報に接した。

本当に惜しい人材を失ってしまった。どう言う言葉を発すべきか分らない。徳谷先生の死をいたみ、お悔やみの言葉を述べ、筆を置きたい。

徳谷昌勇先生を偲んで

太田三郎（千葉商科大学）

徳谷昌勇先生（商学博士）が平成25年2月8日未明、急逝された。私にとってたいへんなショックであり、言葉を失いました。先生とは訃報の1週間前に横浜で会食したばかりでありました。先生は席上、たいへんお元気で、今後の研究・教育活動について熱心に、意欲的に語られていましたので、この悲報はいまだに信じられない、まさかの出来事でありました。

徳谷先生は平成24年度から千葉商科大学大学院政策研究科（博士後期課程）のリスクマネジメント研究講座の客員教授として本学大学院生の博士論文のご指導をされ、1,2年後には博士（政策研究）を輩出する予定でありました。残念・無念としか言いようがありません。

徳谷先生は、私が学生時代に会計学講義をうけた最初の先生でありました。また、大学院卒業後は学会、特に経営行動研究学会を通じて、公私にわたりたいへんお世話になった先生でもあります。東京農大に学位取得を勧めていただいたのも徳谷先生でした。先生には計り知れないご恩をうけております。

徳谷先生はリスクマネジメント研究の第一人者のおひとりでありました。多数の公的機関の諮問委

員および学会会長、常任理事として関わってこられました。日本内部監査参与、東京消防庁火災予防審議会・地震対策部会委員、経済産業省「リスクマネジメント規格委員会」委員、危機管理システム研究学会の初代会長、経営行動研究学会常任理事、農林水産省「農畜水産物の安全と危機の考え方」委員会委員、内閣府食品安全委員会「専門委員」、国土交通省「適正な水利利用のためのコンプライアンス確保についての検討会」委員などを歴任されました。

徳谷先生とご一緒に進めていた研究・教育の諸活動は一見絶ち切れになったようにみえます。しかし、先生のご遺志は、いまだ存続しております。先生が残された「未来質」を追究し続けることが私に課された仕事の1つと考えております。ご冥福をお祈り申し上げます。

リスク随筆

日本の再出発 その2 政治・行政編

伊藤 正次（フューチャーリンクス株式会社）

笹子トンネルの崩落事故が起きましたが、完全に人災です。そもそも、ボルトの挿入方向が垂直で、力がかかる方向だし、それを接着剤で隙間を埋めるというずさんな考え方。本質的に安全な構造、工法を取り入れるべきです。

この事故で思い出す事は、1996年に北海道で起きた豊浜トンネルの崩落事故。大規模な崩落が起きる前、2度小規模な崩落が起きたにもかかわらず安全対策を怠ったとして北海道開発局の元幹部2名が書類送検されたが、不起訴処分。遺族は国を相手取り民事訴訟を起こしたが、判決では賠償金の支払いを命じたものの、責任は明確にされなかったとの事です。(Wikipedia から)

政治、行政のリスクマネジメント

責任を明確にしないと、次にどうすべきかが明確にならないと思います。法律になんらかの不備があったからなのか、詳しくはわかりませんが、裁判は“官”が被告の場合は判決が甘いと感じているのは私だけでしょうか。老朽化したトンネル、橋などを放置したままで事故につながった場合、管理責任者の責任を厳しく追及するようにしてもらいたいです。2月10日に浜松で橋を支えている2本のケーブルのうち1本が切れ、渡っていた高校生7人が間一髪で助かったとのこと。たまたま運動神経の良い運動部の男子高校生だから皆助かったのですが、大事故になった可能性もあります。インフラの点検に必要な予算を優先してつけるべきで、有りがちな新規建設への予算配分を極力慎重にすべきでしょう。これは行政だけではなく、議会の責任でもあります。

笹子トンネルの天井板のようなずさんな工法のものではなくても、老朽化により至急修理または使用禁止にしなければならない橋などの設備は全国に多数あるそうです。15万5千ある道路の橋で建設後50年経過したものは現在9%あり、10年後には26%を超えるそうです。(NHKホームページから)トンネル、水門、港湾設備、水道、ダムなども次々と寿命を迎えます。点検・保守できないなら新たなインフラは作るべきではないでしょう。

将来に向かって

前編、“医療のリスクマネジメント”で隠さず、ごまかさず、逃げずに組織を運営する事が大切と書きました。政治、行政でも全く同じ事が言えます。「絶対安全」、「経済的」と政府、東電が言っていた原発が大変な損害を国民にもたらしました。不安な点を隠し、補助金で地元住民を懐柔=ごま

かし、検査記録を何度もごまかし、原発の事故後に経産省の原発推進派、御用学者、東電が責任逃れをしている事はみなさん、ご存じの通りです。

さて、老朽化したインフラの話に戻しましょう。今後、改善すべき点として提言したい事は、設計図、施工図、点検記録、補修記録などの文書を残す事です。自治体で保管すべき橋などの設計図や点検記録が紛失して、保守のために図面を作る事に多額の費用が発生しているそうです。市町村合併などが一つの遠因だそうですが。今の時代、紙のデータをスキャンして電子化、保管するコストはたいしたことはありません。なるべく電子化すべきでしょう。紙だから保管、検索が難しいのです。

最後にもう一つ。かつて首都機能移転の話が何度か出て消えました。一極集中をやめて地方と東京との経済格差を無くすという事が最大の論点でしたが、今は経済格差の事よりもリスク分散のために一極集中を止めるべき時です。NHK スペシャル メガクエイクⅡ (2012年4月8日放送) で、スマトラ島沖では2004年、2005年、2007年と巨大地震が連鎖。東日本大震災はそれで終わりではなく、巨大地震の連鎖の始まりとの事です。巨大地震で東京の低地は津波で水没する事が予想されています。また、80年周期で起きている関東大震災が前回の1923年から90年経っているわけで、今日、明日起きてもおかしくありません。さらに、東京は富士山が噴火した場合、火山灰に覆われる可能性が高いです。道州制の議論を積極的に進め、日本全体のリスク軽減のために東京一極集中を速やかに解消すべきでしょう。

お知らせ ～ 「リスク随筆」募集 ～

広報・編集委員会

昨今リスクを強く意識されるニュース・事件が多発しております。こうした状況に対して、当学会でも分科会活動とは別個に本誌を通じて気軽に様々な意見や議論を交わすことが必要ではないかと考えました。

当学会には、それぞれの専門分野の先生のみでなく、実務家の先生方も多数在籍されております。こうした当学会の特徴・強みを大いに活用し、専門分野を超えた意見交換や議論ができれば、有意義な提言が可能であると考えております。つきましては、下記の通りリスク随筆を募集いたします。

リスク随筆の募集要項

テーマ 「リスク」に関連することであれば、何でも結構です。

募集期限 随時

掲載時期 毎号のアリマス・レターにて

投稿要領 A4判1ページ程度

採用可否 広報・編集委員会にて審査の上、掲載の可否を判断させていただきます。

応募方法 下記応募先にメールにてご提出ください。

応募先 事務局担当 日下宛 e-mail: office@arimass.jp

分科会報告

【RMS（リスクマネジメントシステム）研究分科会】

主査 指田 朝久（東京海上日動リスクコンサルティング）

リスクマネジメントシステム研究分科会は現在2つのワーキンググループを平行して開催しています。

「リスクマネジメント事例研究WG」は毎回講師の先生をお呼びし様々な分野の事例を研究しています。開催場所は東京海上日動リスクコンサルティング株式会社です。1月28日に「災害リスクマネジメントについて」と題して日本経済大学大学院准教授仲間妙子さんにお話を伺いました。次回は3月12日に「リチウムイオン電池の安全性」をテーマに内田知男氏にお話を伺う予定です。

「ISO31000研究WG」はISO31000の定めた各項目について詳細に研究しています。開催場所はMS&AD基礎研究所です。今年度はISO31000の今までの研究の集大成を行い、6月の大会で成果発表をする予定です。今年は1月21日と2月25日にWGを開催しました。次回は3月28日です。

【リスク事例サロン分科会】

主査 小島 修矢（クエスト コンサルティング ロンドン）

事務局 有賀 平（MS&AD 基礎研究所）

「リスク事例サロン分科会」はマスコミ等で取り上げられた事件や危機事例を題材に、会員間で自由に危機管理・リスクマネジメントの観点から情報交換や意見交流を行うことを目的としています。

本分科会は開催の都度参加者を募り、サロンと言う名前のおり、飲食しながらテーマに関連して自由に意見交換を行う会費制の分科会です。

今回は、第62回の報告をいたします。

第62回（2012年1月9日（水）午後6:30～8:30、於 東洋経済新報社 9階会議室）

1. 参加者（15名）： 宮林、中村、竹中、四方、山本（拡）、吉川、宮崎、笹子
山本（祥）、龍崎、豊田、北澤、長井、小島、有賀 ※敬称略
2. テーマ：改訂される COSO の内部統制
3. 報告者：後藤 和廣 氏（MS&AD 基礎研究所）
4. 報告内容骨子

COSO（トレッドウェイ委員会組織委員会）の内部統制フレームワークの改訂作業が進められており、2013年の第1四半期に改訂版が公開される予定。

2013年の第一四半期に COSO 内部統制の新しい改訂版が発行される。

今回の改訂の基本的なコンセプトは1992年度版と同じ。

主な改訂点を挙げると、これまでは明示していなかった17の原則を明示したこと、その原則は内部統制のアセスメント等に役立つこと、目的設定はマネジメント要素の1つであることを明確化したこと等、となる。

また、1992年以降の著しい技術発展を規定に反映させている。

更に、詐欺的行為防止に関わる検討の拡充や、異なるビジネスモデル・組織構造の検討も行っている。

ERM を内部統制よりも広い概念として位置づけ、ERM を内部統制の発展形、内部統制はERM の重要な部分として定義している。

「リスクアセスメント」「情報と伝達」部分に大きな見直しはない。

5. 自由意見・情報交流内容(要旨)

- 日本では、COSO 自身に対する企業の関心が小さい。
- 監査の形骸化が問題となっており、内部統制の実質化が求められている中、今回の改定は、こうした流れを後押しするものだと考えている。
- 内部統制ができることの限界に関することに関して、具体的な変更はない。内部統制に内在する限界は残されたまま。
- 内部統制の範囲を拡大すると、その業務は、会計士ではなく弁護士の業務と主張する弁護士もいる。
- 弁護士と会計士は会社への対応方針が異なる。法律は企業の大きさに関わらず一律であるため、弁護士は会社の大小にかかわらず原則を一律に適用させようとする。
- リスクの大きさやリスク対応能力は会社の大小でおのずから異なるといった現実を考慮すれば、リスクマネジメントの領域に一律適用を基本とする法律家的な姿勢は不整合だと感じる。
- 一部の弁護士は、会計上の問題でも、最後は法律問題だと考えている。
- 会計士と弁護士との業務の奪い合いを監督官庁が代理戦争をしているように見える。
- 技術系の人間にとって内部統制は埒外のことだと考えていたが、経営的な仕事に携わるようになり関心を持つようになった。
- 日本の企業風土には、欧米のリスクマネジメントの概念がマッチしないのではないかと感じている。
- 日本式の考え方はグローバルで理解されない。
- 規定の制定過程が日本と欧米とは異なり、日本の企業が外国に進出した場合、日本式のやり方は理解されず、欧米の仕組みを活用していくしかない。
- 欧州は、米国の仕組みを活用しながら従前の仕組みを残しているが、日本ではそうっていない。
- 今回の改訂で、内部統制の範囲が現行よりも狭くなったようにも思える。目標の設定を内部統制の外に置いた。
- コソキューブの順序の変更は、説明の順番に合わせただけで、重要性の変更ではない。
- コソキューブの説明文言の訳に問題があると思う。たとえば、「課」、「部」、「本部」というニュアンスが適切に理解されるかが疑問。
- 改定前は、事業単位。改定後は Function operating unit division entity level に変更。
- 改訂後の区分は、リスクアプローチの考え方にに基づき、リスクの大きさに応じて報告を求めている意図かと感じている。
- 内部統制といっても、法律的義務とそれ以外とでは企業としての対応が異なる。
- 国内企業にアングロサクソン流のマネジメントが必要だとは思えない。

- 国内にのみ拠点を置く企業であっても、海外と全く無関係の企業はないと思うので、COSO に沿った対応が必要となってしまう。
- 海外では、今回の改訂をマイナーバージョンアップを総括しているようだ。つまり、ビジネスの変化に合わせた改定で、実質的に行動を変えることはないのとらえているようだ。
- 日本がまじめ過ぎではないだろうか。米国では規定が設けられたことについて、もっとフレキシブルに対応している。
- COSO はあくまでも民間の規格であり、米国政府が日本ほど介入していないので、米国では企業ももっとフレキシブルに対応できるのだと思う。
- 経営者を縛る規格であるはずが、経営者は縛られているとは思っていない。結果的には、従業員を縛る規格となっている。
- 日本は単一民族ゆえに縛られているという感覚が強いのではないのだろうか。米国は様々な民族がいて 統一的な仕組みがそもそも必要であり、遵守の適否以前の問題として、明文化がとりあえずは必要があるのだとも思える。
- 日本は本音と建前をうまく使い分けている。建前ではトップダウンとなっていることが、実際にはボトムアップで実行されていることがある。その場合、経営者に責任を負う感覚がない。
- 施策を現場に定着させるには、「これを実施すれば会社がよくなる」とのインセンティブが従業員には必要。
- 日本の企業でも現場力が落ちているので、アングロサクソン流の仕組みに頼る方が適している。
- 今の企業は目に見えること以上のことを求めているので、アングロサクソン流の方法が必要
- 仕組みだけでは不祥事を防ぎ切れていないし、防げない。
- 規格の策定が、ステークホルダーを含めた人々のガバナンスへの関心を向上させ、不祥事の減少につながっていると思っている。
- 法律上の内部統制は財務報告が基本となっているため、不祥事全般をカバーすることはない。

【MRM（メディカルリスクマネジメント）分科会】

主査：藤谷 克己（日本医科大学）

日 時：平成 25 年 3 月 7 日（木曜日） 18 時 30 分～

場 所：東京医科歯科大学 6 号館 6F カンファレンス室

参加者：藤谷、内田、大川、寺本、野村、辻、長井、伊藤、俵積田、土屋、吉川（書記：吉川）

テーマ 1. 年次大会の発表について
2. サイトの立ち上げについて
3. 今後の研究会方針

詳 細：

1. 年次大会の発表について

6 月 1 日（土曜）立教大学にて年次大会が開催されるが、MRM 分科会の成果発表について、プレゼンテーション内容の事前発表として PPT を映写して意見交換を行った。内容は論文「手術合併症に対する危険源分析 HAZOP Study の経験－人口股関節置換術における神経合併症を対象として－大川・野村 2012」発表は野村。

2. サイトの立ち上げについて

ARIMASS の HP の MRM 分科会の掲載内容は、寺本先生が作成された活動趣旨と今までの活動報告を年表にする。また共同発行した「あなたの病院は危ない」の著書紹介とその他会員の論文や著作について逐次掲載する。

3. 今後の研究会方針

今後分科会で取り上げるテーマについて、メンバーからの提案やアイデアが求められた。外部講師を呼んで内容を深めてからテーマを決めるというアプローチとその講師を絞り込むためには先にテーマがある程度決まっていなければならないという基本とで意見交換があった。

- (1) 土屋氏から「想定外への柔軟性と強靱性 レジリエンス・エンジニアリングに基づく組織マネジメント」の東北大 北村正晴氏を講師に呼んで、展開する案が提示された。
- (2) 寺本先生から、ご自身の研究テーマで著作構想でもある「病気をリスクと捉え、それをマネジメントするのが医療の基本という考え」の紹介があった。具体的には、個人の患者を大学病院では連続的にトレースすることはないが、開業医ではかかりつけの患者個人の病気の遷移を LOW テクの統計分析で捉えることができる。例えば癌などは生活習慣との兼ね合いピロリ菌感染などとの関係で発生リスクが高まり、またフラッシュャー（お酒を飲むと顔が赤くなる。かなりの量を飲む）の人は食道ガンになりやすい、というもの。今後の高齢者等の疾患では個人の生活環境によっては、健康寿命伸ばすためにはリスクをいかに個人個人で、また家族もマネジメントすべきか示してあげると効果があり、コストや HIGH テクを使わずに、Risk Management の技法を応用して日常診療と生活習慣の助言ということで進めて、それを体系化できないか。

今回は（2）の提案に基づいて、どのように MRM 分科会でテーマを共有できるかを引き続き議論していく。簡単にまとめ（見える化）をし、改めて研究会で話してもらうことになった。また、これに関連して、現代の流れとして「健康」の定義が変わりつつあることも意見として挙げられた。

【企業活性化研究分科会】

主査：山本 洋信（アップライフシステム研究所）

<第五十四回 2012年12月15日(土) 時間: 13:30~17:00 於: 専修大学・神田校舎>

1. 参加者：井端、大野、大柳、小林、柴山、杉本、高市、星野、宮川、山本、渡邊（11名）
2. テーマ：企業再生論の先行論文研究

『FINANCIAL RATIOS, DISCRIMINANT ANALYSIS AND THE PREDICTION OF CORPORATE BANKRUPTCY BY ALTMAN, E.I. [1968]』
(The Journal of Finance, Vol.23, No.4, pp.589-609)についての検討

- ・報告者：宮川 宏
- ・配布資料：8枚

3. テーマ：①再生企業の分析研究[対象企業・I社]

- ・報告者：渡邊 繁生
- ・配布資料：8枚
- ・報告内容：本報告は、I社（以下、同社）の再生について分析したものである。同社は平成15年10月に精密測定機器・電子部品の販売を目的に大阪証券取引所へヘラクレス上場P社の子会社として設立された。同社は、平成19年2月に札幌証券取引所アンビシャス市場に上場したが、平

成23年5月に金融庁証券取引等監視委員会から循環取引の指摘を受け、同委員会の調査が入った。その後、同社は資金繰りの悪化により同年9月に破産手続きを申請した。

本分析は、第一に、平成19年6月期時点における粉飾を検討した。第二に、白田倒産判別モデル（以下、白田モデル）を用いて倒産の可能性を究明した。第三に、同社の再生可能性について①事業・商品の将来性、②取引先の信用維持、③経営者の経営能力・信頼度・熱意、④財務内容、⑤資金調達力の5つの再生条件を当てはめ考察した。

同社における粉飾は、同社の第三者委員会調査報告書と有価証券報告書等を基に分析すると、平成19年6月期における売上の前倒し及び原価圧縮、平成21年6月期から23年6月期までの循環取引であったことが判明した。次に、白田モデルによる分析では、平成19年6月期の数値から不適切な会計処理を除いたもので算出した結果、倒産の可能性が高かったと推測した。最後に、同社の再生可能性を検討すると、平成19年6月期時点では国内液晶パネルメーカーとの取引が売上高の一割を超えているため、①事業・商品の将来性、②取引先の信頼維持、③経営者の能力の3項目については期待できそうでもあった。しかし、同社の経営者は、市場環境への対応が遅れると優位性を失う恐れがあり、事業計画どおりに販売活動が進まないことを念頭に入れる必要があったと推察した。また、④財務内容と⑤資金調達力については、証券取引所に上場することで資金確保できると考えたため、粉飾数値のまま上場に踏み切った可能性があるとして指摘した。

4. テーマ：統計解析に関する検討

- ・ 多項式による予測モデル(最小二乗法による直線型・曲線型)の検討
- ・ 回帰分析（単回帰：単純回帰方程式 or 回帰直線）・時系列分析（季節変動モデル）
（文責：柴山祥明）

<第五十五回 2013年1月27日(日) 時間:13:30~16:30 於:専修大学神田校舎>

1. 参加者：井端、大野、小林、柴山、菅原、山本、宮川(7名)
2. テーマ：企業再生論の先行論文研究

『Turnaround :Retrenchment and Recovery by D.Keith Robbins and John A.Pearce II』のまとめ

- ・ 報告者：小林宗一郎
- ・ 配布資料：4枚

3. テーマ：企業再生論の先行論文研究

『Retrenchment: Cause of Turnaround or Consequence of Decline by Vincent L.Barker III and Mark A.Mone』のまとめ

- ・ 報告者：柴山祥明
- ・ 配布資料：3枚

4. テーマ：再生企業の分析研究

『急激な信用低下にも対応できる財務分析－S社のケース』

- ・ 報告者：井端和男
- ・ 配布資料：10枚
- ・ 報告内容：本報告は、S社（以下、同社）について分析したものである。本分析の評価法は、第一段階で自己資本比率（30/10の法則）により財務安全性の評価、第二段階で成長性と効率性(粉飾性)により収益性の評価をおこなう。その後、第一段階の結果と第二段階の結果を用いて再検討する。再検討後の結果で総合的に評価するものである。

同社の分析評価は、先ず第一段階の財務安全性の評価をおこなった場合、自己資本比率は20年

度まで40%台、23年度まで30%台であったため安全領域であると考えた。加えて、24年度末の純資産残額は6,451億円であり、自己資本比率は24.7%であるため準安全領域であったと考えている。

次に、第二段階の収益性の評価をおこなった場合、同社の直近4年間純損益の平均値は△1,200億円である。成長性については減収の影響と減収による利益率低下等により△600億円と考えられる。また、効率性については純資産回転期間上昇分の1.38ヶ月分が含み損と考えれば△2,824億円と計算される。第一段階の結果を第二段階の結果で再検討してみると、純資産額は1,827億円、自己資本比率は7.0%となる。再検討後の評価では、すでに危険領域であると指摘している。

したがって、循環過程と診ればまだ安全領域に留まっているが、構造的下降とみればすでに危険領域に突入したとみるべきであろうと結論つけた。

(文責：柴山祥明)

注]2月に予定していた第五十六回の定例分科会は、会員・会場の諸事情により3月に延期した。

【価値ベース・リスクマネジメント研究分科会】

主査：藤江俊彦（千葉商科大学）

<第30回>

1. 日時、場所：2013年1月23日（水）時間：18：30～20：30 於：千葉商科大学
2. 参加者：9名
3. 報告：篠原雅道氏（株式会社 インターリスク総研 上席コンサルタント）
テーマ「どう取り組む、3. 1 1後の事業継承～事業継続マネジメントシステム（BCMS）の世界的潮流～」

学会員の学位・論文・新刊書のご紹介

著書名：大震災後に考える リスク管理とディスクロージャー

著者：「震災とディスクロージャーを考える会」

柴 健次・太田三郎・本間基照 編著

内容：大震災から得た知見を無駄にしてはいけない。情報やリスクという観点から、予防だけでなく、起きてしまった災害の被害を可能な限り減ずるために何をすべきか、何ができるかを考える！

【序論1】国難候補の巨大地震と企業の事業継続計画

関西大学社会安全学部長・教授（京都大学名誉教授）

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長河田恵昭

【序論2】破壊的リスクに対する管理可能性—危機的管理も

しくは管理の危機性—Conservatoire National des Arts et Metiers 教授 Alain Burlaud（吉岡正道・訳）

【第1部】理論的提言

第1章 リスクのディスクロージャーに関する研究の必要性／柴 健次（関西大学教授）

第2章 市民社会の変容とディスクロージャー／小林麻理（早稲田大学教授）

第3章 行政によるディスクロージャーの役割／柴健次（関西大学教授）・佐藤綾子（早稲田大学大学院博士後期課程）

第4章 有事の風評被害とレピュテーション／岩淵昭子（東京経営短期大学教授）

第5章 安全文化強化のための評価システム／中島真澄（福島学院大学教授）

第6章 ディスクロージャーの数理的手法／鈴木忠雄（福島学院大学准教授）

【第2部】制度的提言

第7章 被災中小企業の対応と復興および支援の実態分析とその必要性／太田三郎（千葉商科大学教授）※

第8章 大震災による中小企業の被災状況に関する緊急調査報告／金子友裕（岩手県立大学准教授）

第9章 大震災後の金融機関の事業継続と被災中小企業への金融支援／斎藤壽彦（千葉商科大学教授）※

第10章 大震災後の損害保険の役割について—中小企業のリスクファイナンスを考える— / 小島修矢（千葉商科大学非常勤講師）※

第11章 大震災による浸水被害と産業被害の実態調査からの提言／仲間妙子（日本経済大学准教授）※

第12章 産官学連携による震災復興への大学の役割／釜瀬幸一郎（インターリスク総研）※

【第3部】実践的提言

第13章 想定外リスクの見極めと2次的災害を防ぐ実践的対応／本間基照（インターリスク総研）※



- 第14章 日本企業におけるBCMの現状と今後の課題／田代邦幸（インターリスク総研）※
- 第15章 想定外の危機事象が発生したときの企業のあるべき姿／大森勉（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）
- 第16章 上場会社の震災ディスクロージャー／円谷昭一（一橋大学）
- 第17章 東京電力のパラドックス—配当金および役員報酬の肥大化—／吉岡正道（東京理科大学教授）・野口敦子（同大学講師）・末原聡（東京理科大学講師）
- 第18章 震災から被災地に立地する大学が学び得たこと—石巻専修大学の1年のあゆみから—／岡野知子（石巻専修大学教授・川村 暁（同大学講師）

注)※印が当学会会員及び賛助会員

出版社	同文館出版株式会社	単行本	248 ページ	発売日	2013/03/11
ISBN-10		ISBN-13:	9784495198510	価格	2500円+税

著書名：BCMS（事業継続マネジメントシステム） 強靱でしなやかな組織をつくる

著者：渡辺研司&BCM/ERM 融合研究会

著者略歴：渡辺研司：名古屋工業大学 大学院工学研究科社会工学専攻 教授 工学博士、MBA。

BCM/ERM 融合研究会：(株)インターリスク総研 小林誠、飛嶋順子、長井健人

内容：ISO22301「事業継続マネジメントシステム(BCMS)—要求事項」が2012年5月に公表されました。この規格は、非常に広範な知識の複合で構成されており、理解するためにはBCMの側面、リスクマネジメントの側面、ISO のマネジメントシステムの側面など、様々な側面から読み解く必要があります。

また、ISO22301 は、世界的な課題である「持続可能な発展」を実現するために、BCMS の実現によって企業が社会的責任を果たすべきであることを問うており、第三者認証の認証規格ではありませんが、その内容は大変魅力的で哲学的な側面も有しています。自社の事業継続を社会との関わりを持って、真に豊かに、組織に定着させたいと考えるならば、BCMS を構築してPDCA を回すという方法論だけでなく、この哲学的側面も重要な要素と言えます。

本書は、複合的な視点でISO 22301 を読み、その真の考え方を知りたい、真に自社のBCMS 構築のためにISO22301 を効果的に活用したいと考えておられる方に向けて書かれたものです。



出版社	日刊工業新聞社	単行本	228ページ	発売日	2013年3月18日
ISBN-13	978-4-526-07054-9 C3034			価格	2400円+税

【編集後記】

東日本大震災から2年の月日が過ぎたにも拘らず、復興にはほど遠い状況を見るにつけ心が痛みます。国難ともいえる東海・東南海・南海三連動型、首都直下型などの新たな巨大地震の脅威が予想されている今こそ、リスクマネジメントがその力を発揮すべき時を迎えています。

「大規模な災害からの被害を最小化し、リスクに強い社会的基盤を作る」という学会の使命に従い、当学会は東日本大震災の発災後直ぐ、特別ワーキンググループを立ちあげ、ホームページ、アリマス・レター、研究年報などを通じてその研究成果を社会に発信して来ました。

そうした重要な使命に早くから気づき、研究・教育・実践に立ち上がることを提唱され、当学会を創設された徳谷名誉会長が突然天国に召されました。今次アリマス・レターには追悼文が寄稿されご逝去を悼んでいます。中国のことわざに「飲水不忘挖井人（水を飲むときには井戸を掘った人を忘れない）」というのがありますが、広報・編集委員会はアリマス・レターの編集やホームページの管理運営を通じて、微力ながら、先生の志しに副えるよう、事務局と共に委員全員一丸となって引き続き責務を果たす所存です。

会員の皆さんの活動を適時・適切に報告するなど掲載内容の充実はもとより、会員相互のコミュニケーションの向上、社会／外部への発信力の強化など、今後共改善すべき課題は多々あります。会員・読者の皆様のご意見・ご要望をお待ちしています。

広報・編集委員長 小島 修矢

<事務局からのお知らせ>

1. 分科会連絡先

教育実践分科会

主査：後藤 和廣

TEL. 03-3291-8921/Fax. 3291-8930

e-mail: gotokaz@aol.com

リスクマネジメントシステム研究分科会

主査：指田 朝久

TEL. 03-5288-6584(直)/Fax. 03-5288-6590

e-mail: t.sashida@tokiorisk.co.jp

リスク事例サロン分科会

主査：小島 修矢

Tel: 047-338-6185/Fax. 047-338-6185

e-mail: kojimash@mb.infoweb.ne.jp

メディカルリスクマネジメント分科会

主査：藤谷 克己

TEL. 03-5803-4513 /FAX 03-5803-4513

e-mail: fta-hcm@nms.ac.jp

企業活性化研究分科会

主査：山本 洋信

TEL. 048-874-4491/FAX 048-874-4491

e-mail:

価値ベース・リスクマネジメント研究分科会

主査：藤江 俊彦

TEL. 047-372-4111/FAX047-373-9919

e-mail: fujie@cuc.ac.jp

2. 新入会員紹介

氏名	所属
浜田 勇毅	専修大学大学院

3. 住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更の生じた場合には変更前と変更後を並記のうえ必ず文書・メールにて下記事務局宛にご連絡ください。

発行 危機管理システム研究学会

〒140-0013 東京都品川区南大井 6-3-7

スリージェ南大井ビル (株)リムライン内

TEL. 03-5753-0080 FAX. 03-5753-0086

e-mail: office@arimass.jp

<http://arimass.jp/>

2013年4月16日発行